

特集「ベトナムのガイ人—客家系マイノリティの歴史・ 宗教・エスニシティ—」

序

伊 藤 正 子 *

本特集はベトナム国家が認定する少数民族のうちのひとつで、ガイと呼ばれる人々あるいは自称する人々がいったいどのような人々なのか、かれらの歴史・宗教・アイデンティティにスポットをあてつつ明らかにすることを目的とする。

ベトナムの民族政策の特徴のひとつは、国家が国定の民族を決定し、その分類枠組みに沿って政策を実施する点にある。ベトナムは国民を明確に民族ごとに分類してふさわしい名称を決定し、それぞれに適切な政策を施すことで、諸民族の平等が達成でき国民統合につながると考えてきた。そのため、長期にわたって少数民族地域の調査を行ない、1979年に最終決定を行なって、国定54民族（多数派を占めるキン（ベト）人と53の少数民族）を発表した。現在は総人口9,200万人中、キン人が86%あまりを占め、残りが少数民族となっている。ベトナム人にとって、何民族かということは、身分証明書の記載事項のひとつでもあり、日常生活の中で、生年月日や性別などとともに記載を要求されることも多いため、かなり重要なアイデンティティ情報のひとつとなっている。

しかしこの54の民族の中で、ベトナム人研究者によってそれほど研究されていないのが「ホア（華人）」であり、さらにほとんど研究されることがないのが、漢語系とされる「ガイ（Ngái）」である。ガイとは客家語の「私」の意味で、ベトナムのガイも客家系の集団と推測される。しかし、ベトナムでは、ホーチミン市など都市に多くいる客家と同じとみなして「ホア」のサブグループとして位置づけることなく、ホアとは異なる「ガイ」という範疇をわざわざつくり、1979年の民族分類決定の際に別の民族として認定した。

なぜベトナムは、世界的な常識に従わず、ガイをわざわざ客家と異なる民族として位置づけ、「ホア」に含めようとならないのか。ガイが客家と区別される根拠はどこにあるのか。そもそもガイはどのようなエスニシティの人たちでどのような暮らしをしているのか。しかし、ガイについての研究は極めて限られており、人類学的にも歴史学的にも得られる情報はごくわずかで詳細はわからず、これらは、ベトナムや中国の華人研究に従事する研究者にとって、外国人の調査が許可されないなか長く疑問とされてきた。ベトナムでは、上記の民族政策に奉仕す

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

るため、かなり人数の少ない少数民族についてでさえ調査・研究を進めてきた歴史があり、複数の論文や民族誌が発表されてきた。それに比べガイ研究の少なさは際立っている。

この状況は 2010 年代半ばに入って大きく変わり始めた。外国人による調査に理解を示すベトナム人研究者の援助を得て調査が可能となったからである。本特集に執筆した日本人 3 人をはじめ、ベトナム人の若手研究者の中にもガイの存在に興味をいだく者が現れ、先の疑問に答えるべく現地調査を開始したからである。これらの研究を通じて、ようやくガイがどのような人たちなのか明らかにってきた。詳細は本特集所収の各論文に譲るが、この特集により明らかになった実態と歴史についてごく大まかにいえば、ガイとは以下のような人々である。

確実に遡れる歴史においては、中国南部広西の欽州周辺の農村の一部地域に居住していたガイと自称する人々が、広西の南の端、防城港付近にまず移住し、そこからベトナムのハイニン（現クアンニン）省モンカイに国境を越えて移住してきて、そこにとどまる人々もいたが、さらに土地を求めてバクザン、タイグエンなどの北部各省の農村に広がっていった。そのうちハイニン省に住んでいた人々は、フランスがベトミンに対抗して 1947 年に設置した「ヌン自治国」の住民とされたが、1954 年にフランスがインドシナ戦争に敗北して、ベトナムが南北に分断されることになった時に、南部へと移住した。かれらのうち、ホーチミン市に定住した人々もいるが、その後ドンナイ省やビントゥアン省などに再移住した人たちもいる。またゴー・ディン・ジエム政権の軍隊内で強力な部隊として活躍する人々も出た。しかし 1975 年にベトナム戦争が終わると、今度は海外へ脱出する人々が多く出た。一方、ベトミンに協力していて 1954 年以降もバクザン省やタイグエン省など北部農村地域に残っていたガイの人々の中にも、1970 年代末の中越関係の悪化時に、公職を追放されるなどの圧迫を受け、中国に渡る人がかなり多く出た。このような経過を経て、ガイは、中国南部、ベトナム北部、南部、そして幾つかの西側諸国に散らばって居住するディアスポラの民となったのである。この過程で自称、他称とも多様化し、経験した歴史も大きく異なり、同一の共通したアイデンティティをもつ人々とは言い難い存在となっているものの、観音信仰を維持している点はどこに移住した人々をとっても、ほぼ共通している。

ここで、用語について説明しておきたい。先ほどふれたように、ガイは自称も他称もさまざまに変化してきている。（そのため、人々の同定が時にできづらく、先に述べた歴史の流れをつかむのも非常に困難を伴った。）本特集においても、筆者ごとにガイについての呼称が異なっている。これは、筆者ごとのガイの捉え方（どの地域のガイのいかなるアイデンティティの側面を重視するか）の反映でもあるので、あえて統一しないこととした。

ちなみに、河合論文では国家が認定した 54 民族の中のひとつという文脈ではガイ族の語を用い、旧欽廉地区出身でその後移住を繰り返してベトナム各地や世界に広がり、状況によってさまざまに名乗りを変えている人々（場合によっては、ヌン、ホアヌン、サンジウ、ホア、ハ

ンなどと名乗る)を、越境的なエスニシティをもつ人々として、ンガイ人と定義している。かれらの自称に沿った正確な発音を転写すれば、語頭には n が必要であり、河合はこれに忠実に、カタカナ表記をンガイとしている。しかし、これまでの日本における先行研究が、ガイを用いてきたため、国定民族の方はガイ族を用いている。

グエン・ヴァン・チン論文では特に区別をせず、一貫して the Ngái,あるいは the Ngái people を使っている。これはチンの関心が、北部南部を含むベトナム国内のガイのエスニシティの変容に主に向いており、国家による上からの民族分類など国家権力のエスニシティへの影響よりも、Ngái とその周りの客家やヌンなどとの関係性に注意を向けているためであろう。

芹澤論文では、「ヌン族の華人」という用語を使用しているが、これはベトナムの研究者がハイニン省出身の華人を指して用いている用語でもある。ハイニン省から南部、そして海外へと移住していった人々の他称であり、自称にもなった「ホアヌン」という呼称を、後ろに置かれた形容語が前の名詞を修飾するベトナム語文法に従って、日本語訳したものである。河合は、「ヌンの華人」の語を用いている。

なぜハイニンという中国国境沿いの人々が、ホアヌンと呼ばれるようになったかは、中国からベトナムにきた人々をヌンと呼び、「ヌン自治国」を設立して中国から引き離そうとしたフランスの政策に加え、本来ヌンと呼ばれていたタイ系の人々と区別するために、華人を表す「ホア」を付け加えたためできた呼称であると推測される。この中に、実際には多くのンガイ(河合の用語)、あるいはガイ(後述の伊藤の用語)が含まれているといえるだろう。

伊藤論文では、「ガイ」とガイの区別をしている。前者は権力側から決定された国定民族を意味する場合に、後者は権力側の名づけとは関係なく、少数民族側が自称として述べたり一般の人々の間で自他を区別するための呼称として用いている場合に使用した。伊藤論文は、当初はベトミンに協力し、その後排除圧力があってもなお北部農村に残ったガイの人々を対象としており、国家の政策とそれに対するガイ側の対応を歴史的に考察したものであるので、国家側の視点と、ガイたち自身の在り方を区別して論じる必要があり、この2つの呼称を用いている。

また、河合論文と伊藤論文のサンジウと、芹澤論文のサンジュウは同じ人々を指している。同様に、河合論文のヌン自治地域、芹澤論文のヌン自治区、伊藤論文のヌン自治国は翻訳の違いに過ぎない。これらは個々の筆者の用法を重視し、統一していないことをお断りしておきたい。

各論文に出てくる主な地名は、179 頁の地図を参照していただきたい。河合論文には、中国南部の地図もついている。

本特集のきっかけは、2017 年 2 月 25 日に東南アジア学会関西例会で、ガイについてのワークショップを開催したことである。大変盛況で、東京など遠方からの参加者を含め 30 人が参集し、質疑応答も非常に実りのあるものであった。国立大学二次試験と重なってしまったため、参加できなくて残念という趣旨のメールも複数受け取った。予想以上に関心の高いワーク

ショップだったため、是非特集として残そうということになり、当日の報告者の 3 人に加え、コメンテーターの 1 人であった河合氏の計 4 人で執筆した。本特集はディアスポラしたガイが居住する全ての地域を網羅できてはいないものの、現地調査に基づき、ベトナム全土に加え中国やその他の移住先国まで視野に入れた初めてのまとまった諸論考である。

最後になるが、芹澤論文と河合論文を読んでいて、ガイはエスニックグループのようにみえるが、そもそもエスニックグループではないのではないかという思いに筆者（伊藤）はとらわれた。それは、両論文で描かれる「ヌン族の華人」「ンガイ人」とも、「共通の出身地域」をアイデンティティの核にした存在なのではないかという疑問である。タイトルに自ら「エスニシティ」を冠しておきながら申し訳ないのだが、そもそも中国にとってもベトナムにとっても、「エスニシティ」概念は社会主義的な民族政策を通じて、ソ連から持ち込まれたものである。そしておおざっぱに言えば、ソ連のエスニシティ概念はヨーロッパ起源のものであり、この中国南部からベトナム北部山間部という地域にとって、人々のまとまり、「われわれ」と「かれら」の境を考える際、それは必ずしもあてはまらないのではないかと、という議論を以前、拙著¹⁾の中で展開した。その際、「われわれ」と「かれら」を分ける基準は、状況に応じて可変的ではあろうが、基本は「父系血縁集団」、それから祖先が同じであったとされた同姓の集団であった。その例との比較でいうならば、ガイを規定するものは、「欽州・廉州」の出身者の子孫であるということなのではなかろうか。それは、芹澤論文で示されているように、「欽廉から来た」と自己紹介する人々や、オーストラリアなど海外に移住しても「欽廉同郷会」を組織する人々のアイデンティティの在り方がそれを象徴しているように思われる。また、ガイのコミュニティにはしばしばサンジウが含まれているのも、サンジウが欽州・廉州の出身者であるからと解釈できる。サンジウは、ベトナムの国定民族分類から言えば、ひとつの別民族のはずだが、しばしばガイと通婚しているケースも見受けられる。ガイの言語が客家系であるのに対し、サンジウは広東語の方言を母語としているが、これらの現象も、「欽州・廉州出身者」がかれらのアイデンティティのよりどころであるためとすれば容易に理解できよう。エスニシティ論が中国南部からベトナム²⁾北部にかけての地域にそのまま応用できるかどうかについては、今後とも検討が必要と考える。

本特集が、緒に就いたばかりのガイ研究のたたき台になれば幸いである。

なお、本特集に収められた各論文の概要は以下のとおりである。

1) 伊藤正子、『民族という政治―ベトナム民族分類の歴史と現在』三元社、2008 年、111-117 頁。

2) ベトナム南部において、「われわれ」と「かれら」の境を形成しているのは、歴史的には、宗教ではなかったかと筆者（伊藤）は考えている。これについては別稿を期したい。

河合洋尚

「越境集団としてのンガイ人ーベトナム漢族をめぐる一考察ー」

ベトナムの漢語系民族は、一般的にホア族、サンジウ族、ガイ族の3つであるといわれている。この3つの民族は、概説書においてもあたかも異なる特徴をもつ民族であるかのように描かれている。しかし、ベトナムでフィールドワークを進めた結果、これらの民族が本当に完全に分けられるかどうか疑問であった。こうした問題意識に基づき、本論は、広西南部から移住したンガイ人という客家系集団がベトナムに存在しており、その後、ホア族、ヌン族、そしておそらくサンジウ族の一員ともなっていることを指摘した。ンガイ人とは、先行研究で「ガイ」と呼ばれてきたガイ族の前集団であるが、ホアの客家やヌンの華人にも一部存在する。したがって、本論文は、ベトナムにおける既存の民族カテゴリーに依拠して別個に考察するのではなく、ンガイ人という「隠された」エスニック集団が存在しており、彼らは状況に応じてその姿を変えてきたことを論じた。

Nguyễn Văn Chính (グエン・ヴァン・チン)

“Memories, Migration and the Ambiguity of Ethnic Identity: The Cases of Ngái, Nùng and Khách in Vietnam” (記憶、移住、曖昧なエスニックアイデンティティーベトナムのンガイ、ヌン、カイックの場合)

本稿はベトナムで客家系の方言を話すエスニックグループの居住地域で実施したフィールド調査に基づくもので、誰がンガイであり、かれらがどのように自身のエスニシティを認識しているかという問いに答えようとするものである。われわれの調査によれば、ンガイとカイック(客)は、異なる地域に住み、さまざまな名称で言及されるにもかかわらず、文化、宗教、言語、歴史などに共通性をもつことが明らかになった。かれらのエスニシティについての認識はしかし、比較的変わりやすいものでかつ曖昧であった。それは一部には、移住や共住、落ち着き先における他のグループとの相互作用によるものであろう。これらは、エスニシティは可変的で状況が変化するのにつれて変わるという理論を強化するものであった。

芹澤知広

「ヌン族の華人の祀る神ー中国・ベトナム・オーストラリアの現地調査からー」

「ヌン族の華人 (Hoa Nùng)」は、1945年の第二次世界大戦の終結後、現在のベトナム・クアンニン省(当時のハイニン省)に成立した「ヌン自治区」の住民のうち、1954年の南北分離によってベトナム南部(当時のベトナム共和国)へと移住した人々である。この語は、現在のベトナムの行政用語の「ヌン族」と「ホア族(華人)」にはうまくあてはまらない民族集団を指すための学術用語として、現在ベトナムの研究者が用いている言葉から借りている。ま

たベトナム南部華人社会の民俗用語では、かれらを指して広東語で「防城人」や「海防人」という言葉が使われている。かれらの民族性は、中越国境地域という文化的な共通性をもった領域を土壌とし、ハイニンという特定の場所で、19 世紀から 20 世紀にかけての特異な歴史状況の下で、育まれたものである。そして、その民族性の中心に、かれらの移動とともに、ハイニンからベトナム南部へと移動した「護国観音廟」という宗教施設がある。護国観音廟や他のヌン族の華人の民間信仰の廟宇には、「案首公公」、「伏波將軍」、「社王」、「高山大王」など、中越国境地域沿岸部やベトナム北部に固有の神々が今も祭祀されている。

伊藤正子

「ベトナムの『華人』政策と北部農村に住むガイの現代史」

北部山間部省の農村に住む「ガイ」と自称する人たちの身分証明書の民族名欄には、「ホア（華人）」と記されている。「ガイ」という民族が、一民族として認められているにもかかわらず、である。ベトナムに移住してきて最低 3 世代以上がたっていたかれらの中には、ベトミンの独立運動に協力する者も珍しくなかったが、1978-79 年に中越関係が悪化した際、中国に起源をもつ者としてベトナムの排斥政策の対象となり、公職から追われ、中国に帰国する者が数多く出た。その後も、さまざまな差別政策の犠牲となってきたが、21 世紀に入り、中国広西でのさとうきび伐採のための労働力需要を満たすため、78-79 年に中国へ渡った人々との間の親族ネットワークを利用して、密出国出稼ぎにいくルートをつくりだした。この出稼ぎネットワークは、他の少数民族や多数派のキン（ベト）人をもまきこみ、ベトナム北部全域に及ぶようになっている。本稿ではかれらの個人史を通じて、ベトナムの排斥政策が、中国との関係が切れていたガイの人々に中国とのネットワークを新たに作りだした皮肉な歴史を描く。

The Ngái in Vietnam: The History, Religion, and Ethnicity of the Minority People of Hakka Origin

Foreword

Ito Masako*

The highlight of this feature is a comprehensive introduction to one of the ethnic minorities recognized by the Vietnamese state—the Ngái. Through this feature, we aim to elucidate their ethnicity as well as their history and religion.

One of the characteristics of Vietnam's ethnic minority policy is that the state determines an ethnic group as official and implements policies under the framework of this classification. Vietnam considers that, in order to achieve unity in the nation, efforts must be taken to attain equality among all ethnic groups. This may be done by classifying its people into ethnic groups, naming them appropriately, and then implementing policies suited to each group. To this end, long-term surveys were conducted in areas inhabited by ethnic minorities, and 54 official ethnic groups (comprising of the majority—currently, 86%—Kinh (Viet) people and 53 ethnic minorities) were announced after analyzing the data and arriving at a final decision in 1979. In Vietnam, one's ethnic group is a rather important piece of identity information, as it is not only recorded in one's identification card but also requested along with information such as date of birth and sex.

Yet among these 54 ethnic groups in the current total population of 92 million, the 'Hoa' and 'Ngái' groups are among the least researched groups; the latter is thought to be Sinitic and is even less researched than the Hoa. 'T' in Hakka language is Ngái, and the Vietnamese Ngái are also regarded as a group close to Hakka people. Even so, they were not classified under a 'Hoa' subgroup, like the many Hakka who live in cities such as Hồ Chí Minh City, but were put in the new category 'Ngái,' thus recognising it as a separate ethnic group, different from 'Hoa,' in the 1979 classification.

Why did Vietnam go against common knowledge and define the Ngái as a non-Hoa ethnic group, different from the Hakka? After all, what kind of ethnicity do they have or how are they living? We lack appropriate answers to these questions, as research on the Ngái is very limited;

* Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

moreover, the anthropological and historical information that can be gathered is scarce. As foreigners were initially not given permission to conduct surveys on the Hoa in Vietnamese rural areas, the abovementioned issue has long been a stumbling block for foreign researchers studying ethnic Chinese in Vietnam. Vietnam is known to have Vietnamese researchers conducting surveys and research on even relatively small ethnic minorities for the purpose of serving the abovementioned ethnic minority policies, and several papers and ethnographies resulting out of such studies have been published. Nevertheless, there is a conspicuous dearth of Ngái related research.

This situation saw improvement in the mid-2010s, when foreigners came to conduct surveys thanks to the support of Vietnamese researcher, Prof. Nguyễn Văn Chính, positive about such initiatives. Researchers who were concerned about the Ngái came to the forefront, including the three Japanese authors of this feature as well as young Vietnamese researchers; with their active involvement, on-site surveys were launched in an attempt to answer the questions raised above. It is through such research that we are coming to understand who the Ngái are. You will learn about them in depth through each of the papers included in this feature, but if I were to provide a general overview of the circumstances and history that come to light in this publication, the Ngái can be described as follows.

Tracing back the history of the Ngái to the point where we have certain knowledge, the people who called themselves the Ngái resided in farming villages in parts of Qinzhou, Guangxi in southern China. They moved first to the south of Guangxi, close to Fangchenggang, and from there across the border to Móng Cái in Hải Ninh (present-day Quảng Ninh) Province in Vietnam. Some remained there whilst others spread to farming villages in other northern provinces such as Bắc Giang and Thái Nguyên in search for more land. Eventually, those living in Hải Ninh Province became inhabitants of the ‘Nung Autonomous Zone,’ established by the French in 1947 in opposition to the Việt Minh, but with France’s defeat in the First Indochina War in 1954 and the division of Vietnam into north and south, they migrated southwards. Some of them settled down in Hồ Chí Minh City, whilst others relocated to Đồng Nai and Bình Thuận Provinces, or elsewhere. Some Ngái formed a strong military unit under the Ngô Đình Diệm government. Yet with the end of the Vietnam War in 1975, many escaped abroad. At the same time, a considerable number of those Ngái who had remained in the northern farming areas of Bắc Giang and Thái Nguyên Provinces after 1954 and who had cooperated with the Việt Minh also moved to China after facing oppression—such as being banished from cadres—when Sino-Vietnamese relations deteriorated in the late 1970s. Given their extensive network of movement,

the Ngái became a diasporic group of people spread out across southern China, Northern and Southern Vietnam, and a number of Western countries. This migration process also caused a diversification of endonyms and exonyms as well as great differences in terms of historical experience, thus rendering it difficult to talk about the Ngái as an ethnic group having a single, shared identity. Even so, most of them have in common their Avalokiteśvara faith, which they have retained irrespective of location.

Please refer to the map on p. 179 for the names of significant places that have been mentioned in the papers. Kawai's paper also includes a map of southern China.

This feature goes back to a workshop on the Ngái that was held during a regular meeting of the Japan Society for Southeast Asian Studies in Kansai on 25 February 2017. It was wildly successful, gathering 30 participants including some from Tokyo and other faraway places. The Q&A session was quite productive, and we received several emails from members of the Japan Society for Southeast Asian Studies expressing regret over not having been able to participate due to the secondary examinations for national universities being conducted at the same date. In response to this unanticipated interest, we decided that what was shared during the workshop must be archived for future reference in the form of a feature. Four people accepted the task of authoring the feature: three presenters from the workshop and Kawai, who was the commentator for the workshop. Although this feature does not cover all regions that the diasporic Ngái have resided, it is the first collection of studies to include not only all of Vietnam but also China and other destinations of migration in its field of vision on the basis of on-site surveys.

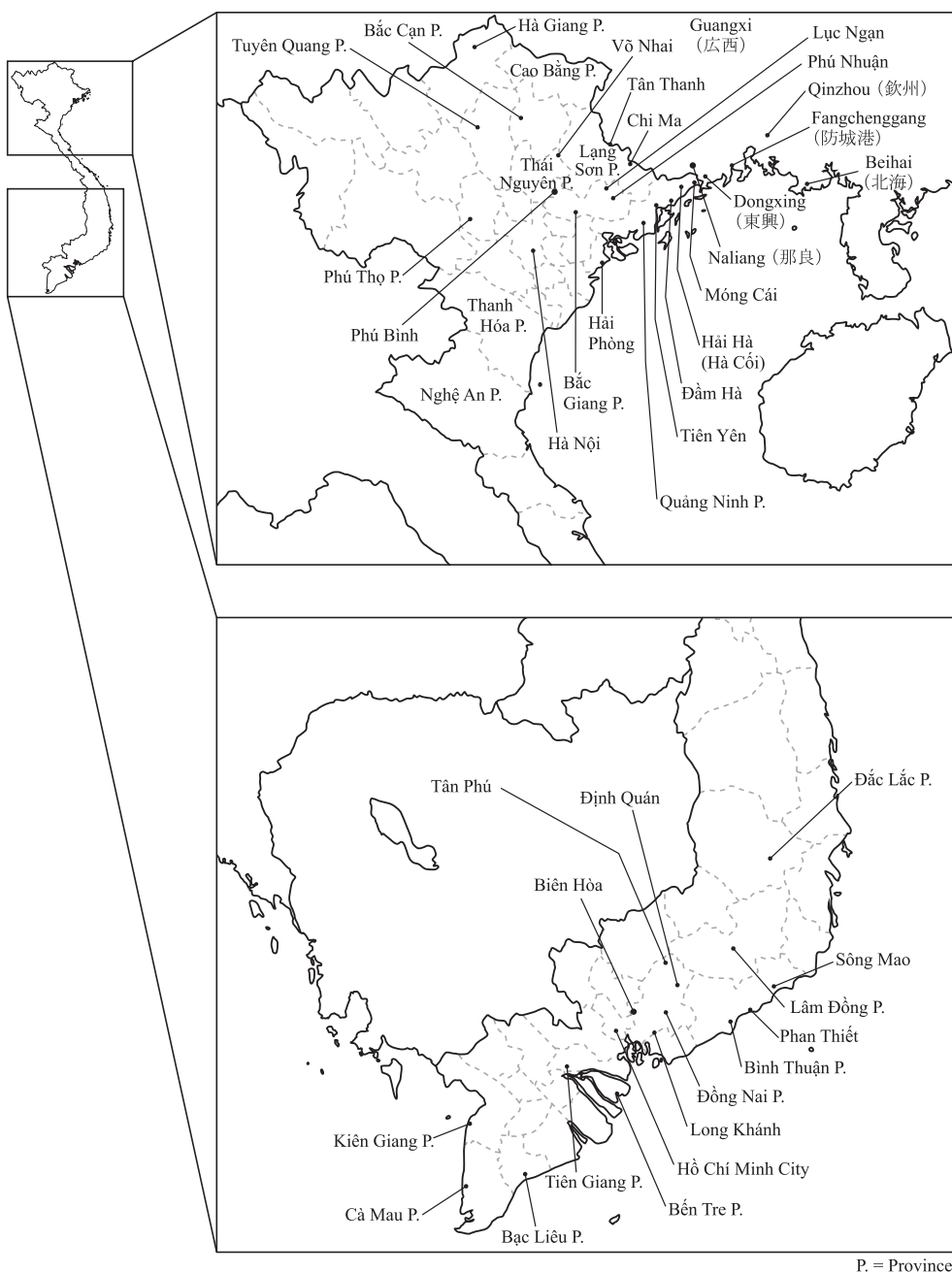
I (Ito) did not intend to make any further points, but as I was reading the papers by Serizawa and Kawai, I observed that although the Ngái seem to be an ethnic group, this might in fact not be the case. The 'Ngái' (the Hoa Nùng) seem to share 'a common place of origin' as the core of their identities. Though we use the word 'ethnicity' in the title of this feature, the concept of 'ethnicity' in the Chinese and Vietnamese contexts is one originally imported from the Soviet Union along with their socialist ethnic minority policies. Since the Soviet concept of ethnicity, broadly speaking, is of European origin, it is not necessarily applicable when thinking about how to group people and how to draw a line between 'us' and 'them' in southern China and the mountainous parts of Northern Vietnam. This is something I have previously discussed in my own writings.¹⁾ Although the basis for differentiating between 'us' and 'them' surely varies depending on the situation, the basic standard there is the 'patrilineal descent group,' that is, a

1) ITO, Masako. 2013. *Politics of Ethnic Classification in Vietnam*. Kyoto & Melbourne: Kyoto University Press & Trans Pacific Press, pp. 76-81.

group of people sharing the same family name and who are thought to have the same ancestors. Making this comparison, what defines the Ngái is perhaps their being descendants of people from Qinzhou and Lianzhou. Emblematic of this seems to be the kind of identity displayed by those who introduce themselves as ‘hailing from Qinzhou’ and those who form ‘Qinzhou Associations’ even after migrating to Australia and elsewhere, as shown in Serizawa’s paper. Moreover, the fact that Sán Dìu people are frequently included in Ngái communities can be explained with reference to the Sán Dìu also originating from Qinzhou and Lianzhou. The Sán Dìu are considered another official ethnic group in Vietnam, but we see frequent instances of their intermarriage with Ngái. While the Ngái speak a kind of Hakka language, the Sán Dìu native language is a Cantonese dialect, but such a phenomenon can easily be understood if we frame ‘Qinzhou and Lianzhou origin’ as the foundation of their identity. I believe we must continue to ponder on whether the idea of ethnicity can be applied to the area spanning Southern China and Northern Vietnam.²⁾

It is my hope that this feature serves as a springboard for Ngái studies, considering interest in this area has only just begun to grow.

2) I (Ito) suspect that what has historically created the division between ‘us’ and ‘them’ in Southern Vietnam is religion. I hope to discuss this in a separate publication.



ベトナム地図